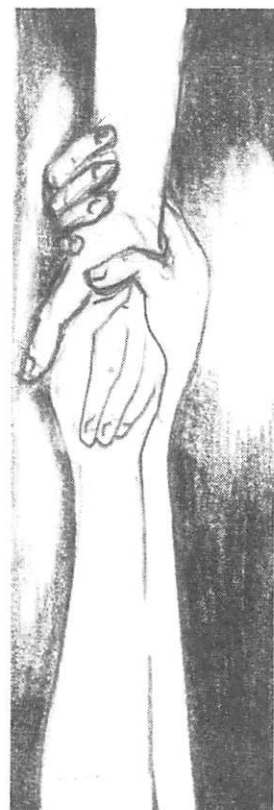


やすらぎ

平成19年・7月号・250円

『一杯のコーヒーには40年の思い出がある。』p.27



冷静さ / よいもの、さらによいもの / 振舞と行動
「反逆の精神」ではなく、「強情という不徳」
恩返し

『ムツリーニとお茶を』Tea With Mussolini
死を迎える時とその様態
カボチャのスープ
一杯のお茶



今月号 内容

アラビア語で「人間」のことを「インサーン」といいますが、その語源は「忘れる」という単語であり、つまり人間とは「忘れる者」を意味するといえます。人間の特性をよく言い当てた言葉ではないでしょうか。確かに私たちは記憶する能力を持つと同時になんでも忘れやすい性質を持っています。受験勉強中、いくら勉強しても覚えられず記憶力を高める訓練法に関する本に目がついてみたり、年をとるにつれ以前と比べて物覚えが悪くなっているのを実感したり。忘れっぽいことに苦労することもあります。反面、忘れることで救われることも多々あります。例えば次から次へと湧いてくる悩みや日々の苛立ちもたいていはしばらくすると忘れ去られ、気持ちが楽になるものです。場合によっては決して忘れられない過去に受けた大きな傷もあるでしょうが、それでも時の経過や状況の変化に助けられ、その傷や痛みは少しずつ癒され緩和されたりします。

人がこうした性質を持つのは自然なことですが、それでも忘れていいこと、忘れたほうがいいこと、反対に忘れてはならないことがあります。例えば恩義はどうでしょう。私たちは身の回りの様々な人々と関わる中で、それぞれできる範囲で助け合いながら生きています。大小や直接・間接に関わらず人の世話になっているわけです。恩義を受けたときに感謝の気持ちを抱くことは当然ですが、それを忘れず感謝を持ち続けるのはなかなか難しいことです。恩義を受けた相手であっても、別の機会に好ましくないことをされるとそれを非難する否定的な気持ちのほうが膨張してしまうこともあります。また私たちは自分が他人に向けた恩義についてはわりといつまでも覚えていて、相手からの感謝が感じられないと憤りを感じたりもします。まさに身勝手な自我が暴発している状態です。人からの恩は忘れず、人の悪い面には目を伏せ、自分自身の善行はすぐ忘れ去ることが社会の人間関係を円滑にし、自分自身をも前向きでさっぱりした心持ちにさせる秘訣ではないでしょうか。

人が恩義を受けるのは人からだけではなく、安全に暮らしていること、十分な食物が得られること、家族や友人がいること、生きていること・・・その他、それぞれの人がおかれた状況で数え上げればきりが無いほどの恵みがあります。一見恵みと思えないようなことでも、人間的な成長の機会が得られた場合その経験にありがたいと思うこともあるはず。こうした口に見えないところで働いている作用や複雑に絡み合っている巡り合わせについてもう一步深く踏み込んで考え、もたらされた先に思いを馳せ、その力に対する恩義を持つことも「インサーン」たる人間の質を高める上で重要ではないかと思えます。

- ☞ 編集部より..... 2
- ☞ 心を知る：ズィクル（アッラーの御名を唱えること）..... 3
- ☞ 預言者ムハンマドを語る：教えの伝達における三つの基本..... 6
- ☞ 冷静さ / よいもの、さらによいもの / 振舞いと行動..... 8
- ☞ こわれた壺：「反逆の精神」ではなく、「強情という不徳」..... 10
- ☞ 恩返し..... 16
- ☞ リサーレイヌールより
懇願し克服すること..... 17
- ☞ 映画から考える：『ムッソリーニとお茶を』
Tea With Mussolini..... 22
- ☞ 死を迎える時とその様態..... 24
- ☞ 祈りのある毎日へ..... 26
- ☞ カボチャのスープ..... 26
- ☞ 一杯のお茶..... 27





ズィクル(アッラーの御名を唱えること)¹

ズィクルとは、文字通りには述べること、思念、想起を意味しますが、イスラーム神秘主義者の用法では、同一の朗唱の集まりでアッラーの名前のうち一つもしくは複数を規則的に唱えることを指し示します。精神的教団もしくはイスラーム神秘主義教団の中には、「アッラー」(神の正式な名前)と唱えるのを好むところもあれば、「アッラー以外に神はなし」を唱えるところ、アッラーの唯一性を宣言するところ、もしくは教団の導師の選択に従ってアッラーの御名から他に一つかそれ以上を選んで唱えるところなどがあります。

感謝と同様に、そうした唱念は言葉と動作の両方を使い、また心を込め良心の他の機能を働かせながら実践されるのがしもべたるものの義務です。言葉を使った唱念は全能のアッラーについてその美名や神聖な属性を利用して述べること。またアッラーを称賛、讃美すること。祈りや嘆願を行う中で彼を前にした人間の無力さ、困窮を表明すること。神の書(クルアーン)を朗読し理解すること。自然界に存在するアッラーの表れやあらゆるものごとの上に見出されるアッラー特有の印を口に出して言うこと、など様々です。

心を主として良心の各種機能を使った唱念には、アッラーの存在と唯一性、また創造の書(宇宙)の中に広がるアッラーの御名と属性の数々に思いを馳せること。我々の生をデザインし整える支配者としてのアッラーの地位から発せられるアッラーの命令と禁止、約束と脅し、報奨と懲罰について熟考すること。そして創造について学び一定の精神的な訓練に従うことによって目に見える存在の覆いの裏に隠された神秘を理解しようと努めることが含まれます。その上、人はそうした理解の数々を経て現れた天国のような美に繰り返し気付くようになります。そして宇宙に存在するものはなんであれ、崇高で荘厳な世界から送られてくるメッセージと共に脈打ち、不可視界の意味を明示し真実中の真実に据えられた窓として機能しているのだと考えるようになります。

この絶え間なく鼓動する存在を感じ、不可視の世界が雄弁に物語るのを聞き、その窓を通じて現れた神の恩寵と威厳を見る者は、全く想像を絶する精神的歓喜に酔いしれるあまり、そのような歓喜のうちに過ごす一時間はそれなしに過ごす数百年という時に匹敵するほどです。その結果、その者は神からの恵みと精神的歓喜のうちに我を忘れて永遠に続く道を歩んでいくことになります。唱念する者が、その栄光を称えられたアッラーの御顔から発せられる光があらゆる存在を取り囲んでいるのを感じる時、その者には言語に絶する光景を目にするという報奨が与えられており、他のあらゆるものがそれぞれの舌を使ってアッラーの御名を唱えているのを自覚し、アッラーの御名の多くを唱念し始めるのです。

アッラーの御名を唱念することによって、時に人は自己を忘れたトランス状態に入ることがあります。

この恍惚状態やわれを忘れた瞑想に耽っている者は、「アッラー以外に存在するものはなし」「アッラー以外に見えるものはなし」「アッラー以外に神はなし」といった言葉を発します。中には、その人の意識の包括性に応じてあらゆるアッラーの御名を意図し心に留めながらも「アッラー以外」とだけ発し、アッラーの唯一性を宣言し続け

¹ この文章が“Key Concepts in the Practice of Sufism”よりの訳です。

る者もいます。アッラーが近くにおられ、一緒におられる雰囲気を感じながら過ごす一瞬一瞬、光と輝きの一瞬一瞬は、(来世での)永遠の生という観点においては光もなく過ごす数年間よりもはるかに幸福で非常に実りある時間だといえます。これは預言者(彼に平安と祝福あれ)がおっしゃったとされるある言葉の中で示されているものです。「アッラーに最も近い天使や、使者として遣わされたどの預言者も私には敵わない、アッラーとの時間が私にはあります。」

動作もしくは体によって行う唱念は、最大限の注意を払って宗教を实践すること、あらゆる義務に熱心に取り組むこと、そしてあらゆる禁止事項を意識的に避けることから成り立ちます。言葉の奥深さや意識は主として動作を伴う唱念に依存していますが、それは神の扉をノックして入室を求め、人の無力さと困窮を表明し、神の力とその富のもとに庇護を求めることをも意味します。

習慣的かつ集中的にアッラーのことを口にする者、もしくはアッラーの御名を一つかそれ以上唱える者は、あたかもアッラーと契約を結んだかのごとくその庇護の下に置かれ、援助を受けることができます。クルアーンの節で「だからわれを念じなさい。そうすればわれもあなたがたに就いて考慮するであろう。」(第2章 雌牛(アル・バカラ)章 152 節)とあるのはこの唱念の度合いについて述べているのですが、その唱念によって、人の内なる困窮は富の、また無力さは力の源となるのです。この節は同時に、日常的にアッラーを思い出し讃美することによってアッラーの恩恵や寛大さが授けられることをも意味しています。

アッラーに祈願しアッラーに呼びかけることは、アッラーの恩恵をもたらします。日常の雑事に携わったり何かに没頭しているときでさえもアッラーを思い起こす者は、この世とあの世の双方からあらゆる障壁が取り除かれるのを見出すでしょう。アッラーが共におられることが常に感じられ、アッラーは一人取り残された者や友情を必要としている者の味方となるでしょう。もし安心と快適の時を過ごすうちにもアッラーを念じその名を口にするなら、その者に困難と苦痛が訪れた時にはアッラーの慈悲が届けられます。アッラーの御名を広めるべく彼の道で奮闘する者は現世と来世の両方で屈辱から救われます。真摯な努力によって、現時点では想像もつかないほどの特別な恩恵と地位によって報われるのです。

アッラーを念じアッラーの御名を唱えんと欲することは、その行いが継続され導きが増すようアッラーの援助によって報われるでしょう。既述の節(第2章152節)の続き、「われに感謝し、恩を忘れてはならない。」という部分は信者が唱念から感謝に至り、感謝からまた唱念を行うようになるという好循環を意味しているものです。

唱念は崇拜におけるあらゆる種類、あらゆる行動の真髄であり、この真髄の源はクルアーンです。その次に、イスラーム法が託された預言者の光り輝く祝福された言葉が続きます。あらゆる唱念は有声・無声に関わらず、アッラーの栄光に満ちた「御顔」からの光の顕現を呼び寄せ体現します。それはまた、すべての人間とジンに対しアッラーを知らしめ、アッラーの印や隠れた恩恵に感謝を示すため世界中の隅々にアッラーの御名を広めることも意味します。アッラーの御名を唱念する者がほぼ皆無となったとき、存在は意味を失います。預言者(彼に祝福と平安あれ)によれば、アッラーの御名を唱える者がほとんどいなくなったとき宇宙の全面的な破壊が始まるとのことです。

どのようなやり方であれ、唱念することはアッラーに至る最も安全かつ適切な道です。それなしにアッラーに到達することは困難です。旅人が良心においてアッラーを想念し、その想念を舌やその他の機能を使って言葉にするとき、援助と(精神的な)糧の尽きることない源泉が出現するのです。

唱念はアッラーに向かう旅を意味します。言葉と感情、心が合唱のごとく一斉にアッラーを想念しその御名を唱

え始めると、人は精神が舞い上がることのできる領域へと昇っていく神秘のエレベーターに乗り込みます。わずかに開いた天国の扉から、得も言われぬ光景が垣間見られるのです。

アッラーの御名を唱えるのに決まった時間というものはありません。崇拜の主たる行為である1日5回の定時の礼拝は5回の指定された時間に遂行されるもので、ある一定の時間は行うことができないものですが(日の出と日没時、正午の太陽が天頂にあるときなど)、信者はいつでも望むときにアッラーを想念しアッラーの御名を唱えることができるのです。「または立ち、または座り、または横たわって(不断に)アッラーを唱念し」(第3章 イムラーン家(アーリ・イムラーン)章191節)とあるように、アッラーの御名を唱念する時間ややり方にはいかなる制限もないのです。

クルアーンやスンナ、そして初期の高潔な学者たちが記した書物の中に、アッラーの御名を唱念すること以上に強く勧められているものを見つけることは困難です。日々の礼拝からアッラーの道における聖なる奮闘に至るまで、それはあらゆる崇拜の魂であり血であるのです。唱念の深さはアッラーに向かう感情の深さに比例します。イスラーム神秘主義者たちはこれを、「心の平安」とか「目の当たりにすること」などと呼びます。

人によっては全能なるアッラーを想念し、神秘的な道の上によって心の中でアッラーに到達する場合があります。また別の場合には心の内側の世界においてアッラーを信頼し彼に助けを請うことを通じ、良心によってアッラーを知り、彼が常に一緒におられることを感じることもあります。こうした人々は不断にアッラーを想念し、心と良心で常に彼を唱念し、彼らの実在の中にアッラーを感じ、アッラーが恒常的に存在するのを完全に認識しながら生活しているので、アッラーを(言葉で)唱念することはアッラーに対する無頓着さ、無知であるとみなします。このレベルのズィクルに到達した者はこのように言います。「アッラーは、私が、今この瞬間に彼を唱念するためには彼を想念しないことをご存知であられる。私がアッラーを忘れたことなど一度も無いのに、どのようにしてたった今、彼を想起し唱念することなどできようか。」





教えの伝達における三つの基本

預言者たちが神意をもたらし、それを他の人々に伝えるやり方は当然、他の人のやり方とは違う。そもそも神意をもたらすという点で、普通の人々が預言者たちに似ることは不可能である。彼らは布教を行なう時、我々に布教とは何か、どう行なわれるべきかということも伝える。このことも、彼らの布教のあり方においてまた違った方向性を構成するものである。ここでは、このテーマを三つの基本に分けて見ていこう。

1. 完全性

預言者は、アッラーからもたらされるメッセージを人間たちに伝える時、それらを専門家として行なう。完全な形で人と向き合い、また人に伝えるべきメッセージも完全な形で紹介する。そのため、預言者の布教の任務において、知恵と、論理と、心、感情といったものが絶対に欠かせない。そして、アッラーの神意から外れるということもない。預言者たちは神意に対して、例えるなら死体を洗う人の腕の中の死体のようである。神意は彼らを動かし、向きを変え、望む方に向けさせる。そして彼らは、どんなに細かいことであっても、アッラーが望まれるものが何であれ、それに従う。これはそもそも彼らにとっては義務である。だから預言者たちはこの点に非常に注意を払うのである。

そのため、布教活動において、預言者たちのなされたやり方に従わない場合は、教えを広めることにおいて成功することができない。例えば、知識抜きでは布教はよい結果を生まない。感覚や感情が放棄されても、同じような結果に終わる。さらには神意からずれてしまっている者たちは、絶対に目標に達することはできない。神意の外に道を求める人間たちのシステムの現状を考えてみてほしい。ある時期、貧困に苦しむ人々を引きずり込み、多くの貧しい国々で空想の中の理想となった共産主義は、度重なる努力にも関わらず、結果として崩壊を免れることはできなかったのである。しかし、このシステムを作り出した者たちは、ある時期には一人一人が偽の預言者のようであった。今となっては、彼らの共同体の者はこのように言っているのである。

「我々はこの道で再び迷ってしまった。

無駄に進んでしまった。私にはわからない、我々は何を得たのだろうか」(Ziya Pasha 1825～1880)

人間が作り出したシステムに従わせようとする者、それに従う者たちは、結果として皆同じところに行き着くであろう。彼らもいつの日か、自分たちが間違っていたことを宣言しなければならないであろう。

預言者が教えを伝える際、知識や論理と感情はそれぞれお互いに寄り添っている。預言者は、ただ人間の感情のみに訴えて、結果として彼らを去らしてしまうことはなく、また理詰めにも迫って彼らをやる気のな

い孤独な者たちとしてしまうこともない。

また、預言者たちは、人々を外へ追いやって暴力主義者にしてしまわないのと同様、彼らを単に感覚や感情でとらえて、行動や目的に欠ける状態にしてしまうこともない。彼はアッラーからのメッセージを人々の心に送る。彼らにおいても行動的な精神の目覚めが起こり、そして人間としてさらに高められるのである。

聖クルアーンでは、このことの記述に際して、預言者ムハンマドに次のように呼びかけている。「言ってみようがいい。『これこそわたしの道。わたしも、わたしに従う者たちも明瞭な証拠の上に立って、アッラーに呼びかける』」（ユースフ章12/108）

この道は、預言者の道である。知識、論理、思考、心、良心がそれぞれ場所を得て、どれ一つとして忘れ去られることはない、道である。預言者と、預言者に従う者たちは後に続く者たちをこのようなまなざしで見守りながら、真実へと招いているのである。

2. 見返りを求めないこと

預言者は教えを広めることにあたって、全く何の見返りも求めない。ただそれを任務として行なうのである。全ての預言者は「私の報酬はただアッラーからもたらされる」と言い、この真実を指摘しているのである。^{*}

3. 結果をアッラーにお任せすること

預言者は、教えの伝達の結果と、それを認めさせることができたかどうかという点についてはアッラーにお任せする。決してその結果をどうこうしようとするのではない。なぜなら預言者は、その任務がただ教えを伝えること、その結果はアッラーのものであることを知っているからである。

この三つの基本を元に、ここからは、布教が預言者たちにおいてどのような特質を持っていたか、またそれぞれの時代にこの任務を果たそうとする者たちがどのような形でそれを行なってきたか、どのような形で行なわれるべきかということを見ていきたい。我々の願いは、アッラーが我々をも、この任務をアッラーの承認を得られる形で、果たせることができるようにしてくださることである。我々の心に布教への熱意を与えてくださるのも、成功に導いてくださるのも、ただアッラーである。我々はアッラーを信頼し、アッラーをお慕いする。

^{*} 聖クルアーン、フード章 11/29；詩人たち章 26/109, 127, 145, 164, 180；サバア章 34/47



冷静さ

あなたが天空にまで高められたとしても、地面がより安全であることを忘れないで下さい。飛行機から落ちた人はばらばらになりますが、地に足がついている人はそのままであり続けられるのです。

良心を決して手放してはいけません。よい思考はそこから生まれるのです。そうでなければ、なかなか閉じることのない傷口ができ、修理することの困難な破損が生じます。その後で分別のある行動をとったとしても、傷口を塞ぐことも、破損箇所を直すこともできないでしょう。

よいもの、さらによいもの

人生は神の恵みです。それよりさらに大きい恵みとは、負債なく生きることです。

最も幸福な人とは、最も罪が短くすむ人です。それよりさらに幸福な人とは、罪に対していつでも閉じられている人です。

時間を自分の思うように刻みこんでいく人もいます。しかし生涯をとおして、時間に自らを刻ませ続ける人もいるのです。

老齢にあってさらに老いを加える最大の苦痛は、老うという悩みなのです。

闇に対し備えることはよいことです。それよりさらによいことは、闇をののしり続けるかわりに、小さくてもよいから明かりを灯すことです。

継続的な細やかな善行は、しょっちゅう中断される大きな善行よりももっと、恵みを齎^{もたら}すものです。

予防のための一歩は、治療のための百歩よりももっと、効果的です。

一つの生命を持つ乳首は、千頭の死んだ牛よりももっと素晴らしく、恵み深いものです。

純潔さと品位は、ムスリムが預言者ムハンマドに従う者であることから齎されるものです。

手の中の雀は、手の中にはいない鳩よりもよりのよいものです。

振舞と行動

信仰の深さは、振舞いによって明らかとなります。

信者とは、アッラーのご拝謁^{はいえつ}を受ける、という注意深さのもとで物事を行なう人です。

雨は雲のある日に降ります。よい行動は、アッラーと結びついた心に存在します。

全てを管理することが可能です。ただ、性格は、難しい…。

年のいった人が乳を飲むのは恥ずべきことですが、そういう人が乳離れをするのは困難です。

全く怒らない人の怒りは、とても特別なものとなります。

曲がった枝の影はまっすぐではないように、心の均衡をうまく調節できない人の行動も、まっすぐではありません。

人々が、あなたの行動を鑑^{かんが}みて、あなたにある位置を与えたのであれば、あなたの態度をかえることもせず、異なる待遇を求めても無駄なのです。

健康よりもなお快いこと、他人の世話にならざるを得ないことよりもなお辛いこと、そして条件が悪くなった時だけ信仰深くなることよりもなお深刻な事態であることはありません。

行動を伴わない言葉、恩義を伴わない友情、健康のない生活は、それぞれ偽りによって構成されているものです。

修業のための籠^{かご}り場は、意志の力を強くします。人はそこで、自らを見出します。そこでは一人になり、誰とも会わないことが基本です。だから、よい内面と特別な外面があることが条件となります。ただ、完成された人は、集団の中において発展していくのです。人々の繋がり^{つながり}を完全に学ぶのは、集団の中においてのみ可能だからです。

愛し合う者たちのように、なじみあい、一体となってください。しかし仕事と行動においては他者であるという原則に基づいて振舞ってください。

自分のことを説明しようとするのはやめなさい。あなたの行動にそれを語らせるのです。





「反逆の精神」ではなく、「強情という不徳」*

問い：「反逆の精神」とはどういう意味でしょうか。革命家の魂の重要な特質と見なされている「反逆の精神」について、ムスリムはどのように考えるべきでしょうか。

答え：反逆・反抗とは、体制や命令に服さず、従わず、対抗し立ち上ることを意味するものです。徳とは、徐々に人の本質の一部となった良い、もしくは悪い性質を意味します。反逆の精神とは、実存主義の思想家たちの用いる言葉として世界に広がりました。実存主義を代表するサルトル、社会に関する思想によって自由を主張する無政府主義者として知られるヘルベルト・マルクーゼ、世界の無意味さに対し反抗し、社会を変える行動に出なければならないと考え、「私は反抗する、その時私は存在する。」と語り、また「反抗的人間」という著作も持つアルベール・カミュといった思想家たちは常に、反抗という思想を叫んできました。しかし、彼らの虚無的な考え方によるなら反抗は、国家をはじめとして全ての支配と対立することであり、国家や既成の秩序、あらゆる法規、そして道徳的価値を破壊することです。イスラーム教徒は、反逆すること、組織されること、全体主義や独裁主義の為に武器を持って戦うこと、革命を起すこととはどういうことなのかということ、まずこの虚無主義者たちから学んでしまったのです。

存在すること、復活すること、そして反逆の精神といったような言葉は、イスラーム教徒の学者たちも用いるものです。しかし彼らはこのテーマを、意志の問題として捉えているのです。ヌレッティン・トブジュがソルボンヌ大学で書いた博士論文の題名も「反逆の精神」でした。彼は、後に書籍化されることとなるこの作品で、まずスピノザやバークソンの自由への見解を批判し、続いて自然界へ、社会へ、国家や、宗教へ、そして独特へ対抗するシュティルナーのアナキズムや、ルソーやショーペンハウアーの反逆的思想について分析しています。そして「私達は迎合主義にも、アナキズムにも反対している。全ての意志を同じ形で明らかにしている一つの意志に対してのみ、個人の協調を認めるのだ。」と、自らの考えをまとめています。

ヌレッティン・トブジュは、反逆の精神を意志の問題と見なしています。このテーマに沿った、「意志の闘争 国家と民主主義」という著作もあります。彼によるなら、真実の、そして完成された意志とは、個人から始まって家族や国家のような権威を認め、民族、人間性といった階段をたどり、アッラーに到達する意志を意味します。従って反逆の精神とは、人が自らの信条、思想、感情、決定、性格によって自らを示すことであり、型にはめようとするものに対し反抗すること、あらゆる問題を、その固有の価値観を

* 昔々ユーフラテス川のほとりに、民衆から慕われたスルタンがいました。壊れたつぼで水を汲み、愛するスルタンに捧げた人がいました。もともと水源そのものがスルタンの所有だったので、このこわれた壺では、なかなか水をすくい上げることができません。それでも、一生懸命水を汲もうとした貧しい人のお話が伝えられています。

「こわれた壺」はその話に因んでいます。M.F.ギュレン師が語っている言葉を文字にした文章の訳です。(HPからの転載)

通した上で自身の意志が持つ視野により新たに評価すること、そして自分のものとすることを意味するのです。

反逆の精神

そもそも反逆の精神を、意志を評価するという観点から見ていくなら、このテーマの根本的な部分はかなり昔に遡ることができます。スナナに従う学者たちの一部は、「真似に過ぎない信仰は承認されない。正しいかどうかを努力して調べてみるべきである。」としているからです。真実にいたるため身を粉にし、努力する、という意味です。一つの問題に関し、根本的な原則や条件をテーブルに広げ、それぞれを組み立てて完全体にし、そのような自身の作業や努力の結果という形に変性させるという意味です。これを分析と合成と呼ぶこともできるでしょう。何らかの出来事において、人の自らの知性、論理、判断、そして価値付けという観点から、このような建設的努力が存在するなら、その結果生じた収穫はその人のものと言えるでしょう。人はそれを、あるいは自身の中に感情や思いが存在しているその思想を、自分のものとしたことになるのです。自ら書いた論文や詩を自分のものとしているように、そこに自身の考え、感情、介入が存在する思想をも、自分のものとするのです。

そもそも信仰とは、アッラーがその崇高なお望みによって人々の心に灯された灯、光です。結果として、人の心に信仰や理解力や確信を創造され、確信を超越する一つの状態に到達させられ、そのお方の崇高さの前に全てが燃え尽きて灰になってしまうような段階へと人を到達させられるのもアッラーなのです。しかしそれぞれの段階へ至っていく過程における探求や確認、そのテーマにおける意欲、強い意志を持って継続させつつイバダをより深く行なうことといった点もまた、それぞれが要因となるものです。これらの要因は人に与えられた意志によって活用されることが可能となります。意志とは一つの傾向もしくは傾向の実践であり、すなわち人が二つのうちどちらかを選ぶ努力をすることです。そもそもこれは最低限の条件であり、この条件においては、要因と結果の間には、両者の間の一致という法則によるつながりはありません。理性で外見を見るだけでは可能だと思えなくても、ほんの小さな種から巨大な松の木を創造される神の力は、人におけるほんの小さな傾向に対しても、とても大きな結末を創造されたのです。意志は添加物に似せることができるでしょう。スプーン一杯の酵母で、鍋一杯の牛乳がヨーグルトになるように、人の意志という名のスプーン一杯の添加物にも大きな報酬が約束され、そして与えられるのです。アッラーが、意志と私たちがよぶこの最低条件に、非常に大きなわざを備えさせておられるのであれば、このささやかな添加物はとても重要なものなのです。

だからこそ、信仰に関わる問題、しもべとしての帰依に関わる問題、そしてアッラーを知るという次元での問題に至るまで、ほとんど全てのことが意志に結び付けられるのです。動物的であることから脱却すること、物質から逃れ心と魂が生を持つに至ることなどはただ意志によってのみ可能となるのです。魂の鍛錬においてその困難なこみいった道を行くためには、意志を正しく用い、我執に対抗し、真剣であり、決意を固めた状態であることが不可欠となります。到達への道は、模倣や真似、外見だけ似せること、あるいは、習慣化された、固定概念に嵌められたようなことを行ない続けることに対する反抗を必要とするのです。だから、虚無主義者のあてずっぽうな反逆と、誠実なしもべの、物質や快樂主義、自我への執

着、現世への愛着に対する反抗とは、全く異なるものなのです。これらのうち片方はアナキズムに基づくものであり、もう片方はクルアーンのもたらした規律のなかで我執や物質へ対抗しようとする、勇敢な行為だからです。

また一方で、教えへの憎悪には多くの理由があります。うぬぼれはその一つです。ある聖ハディースで、アッラーは、「崇高さは私の上着であり、偉大さは私の腰にまく衣である。誰であれ、これについて私と競おうとし、これらを奪おうとすれば、私は彼を地獄に投げ入れる。」と仰せられているのです。そう、アッラーは、そのお方に固有の特性を、横柄にも自分も得ようとする者に信仰の光を与えられません。その心に信仰の玉座が設けられることはありません。なぜなら彼はそこを、うぬぼれで満たしてしまったからです。うぬぼれは、真実を心に感じることを不可能にする覆いです。うぬぼれで満たされた心は、この世界に記された奇跡を見ることができず、被造物たちが何千もの言葉で語っている真実を認識し、理解することができません。なぜなら、真実を心で感じるができなくなると、ものを見ても認識する助けにはならないからです。

ものの見方が誤っていること、物事を誤った観点から見ることにもまた、憎悪への原因となります。時には、物理学的な基準で形而上学を理解しようとする、また時には形而上学でのみあてはまる思考で、物理学を考えようとする、人を誤った結論へと導きます。創造主を知ろうとする道において、観点を正しく調整することが不可欠なのです。そうでなければ、ファラオが高い塔を建て、その上でアッラーを探そうとしたこと、ナムルードが天に矢を射ってアッラーにあてようと考えたことなどは皆、観点が違っていること、意志が正しくないことのもたらした結果です。20世紀になって、ガガーリンがファラオのような考えを再現し、地球の周囲を旅して戻った時、「アッラーに出会えなかった。」と言いました。彼のこの表明に対する、ネジップ・ファズルの次の言葉はとても意味深いものです。「なんと愚かなことか。誰があなたに、アッラーが宇宙を漂う風船だと言ったのか。」

観点が誤っていることと同様に、残虐さ、分を弁えないこと、真実への軽視、そして不注意さもまた、信仰へと開かれた扉にかんぬきをかけ、真実に至る道を塞ぐ障壁です。これらと共に、型にはまること、思慮なく祖先を模倣すること、迷信に従うこともまた、歴史を通して憎悪への要因となってきたものであり、これらに対し対立することは勇敢な行為なのです。クルアーンは様々な章句で、一部の人が、模倣へのこだわりのために真実から遠ざかってしまっていることを強調しています。「かれらに対し、『アッラーが下される啓示に従え。』と言うと、かれらは、『いや、わたしたちは、祖先たちの奉じたものに従う。』と言う。」(ルクマーン章第21節)

ただ祖先を無思慮に模倣するというだけの理由でイスラームを、そしてクルアーンを偽りであるとした人々と同様に、現代においても多くの人々が、父祖から受け継いだ信条や習慣を無知なままに継続させるため、啓典やスンナを偽りであると見なし、信仰の光から遠ざかってしまっているのです。

うぬぼれ、自尊心、不注意さに対するのと共に、フベル・ラート・ウッザ・ナイラといった偶像に対し反抗すること、正しい論理や宗教的原理に基づかない迷信や習慣を認めないことも、反逆の精神の非常に重要な側面を形成するものです。

意志を正しく用いる若者たち

さらに、預言者ムハンマドは「若者たちのうち尊い者とは、年老いた者に似ようとする者であり、また年老いた者のうち最も悪いのは、若者のように生きる者である。」とおっしゃられています。そう、最も尊い青年とは、片足が墓場に入っている老人のように、常に死や死の先のことを考え、来世における糧を準備しようと努め、若さの情熱にとらわれることのない、また不注意さにおぼれることのない者です。老人のうちで最もよくない者とは、年を加えているにも関わらず、いまだに不注意さのなかにあり、死を遠いものと見なし、一部の若者のように情熱を追って駆け回っているような者です。他のハディースでも、「アッラーは七通りの人を、白らの影以外に隠れるところのない審判の日、その陰のもとに庇護されるだろう。」と言われ、生涯をイバーダの喜びのうちに送る若者も、その七通りの中に含まれたのです。なぜならその若者は、自我が最も強い時期において、肉体的欲望にも関わらず、自らをアッラーのしもべとなることに捧げたからです。イバーダの精神によって成熟し、しもべであることをその本質の深部にある特性とし、どこから見てもその顔に、しもべであるしるしを見いだすことのできる状態となったからです。血が騒ぎ、人間としての本質が彼を様々な罪へと追い立てるような年頃にあつて、肉体的、性的な欲望に対抗し、罪に対して反逆の旗を掲げたのです。女性であれ男性であれ、一人の若者にとってその時期を純潔を穢さずに過ごし、罪に落ちることなくやり過ごすことは非常に困難なのです。一方でアッラーに服従し、そのしもべとなり、また一方でアッラーが好まれないことに対抗し、アッラー以外の何かのしもべとなることを拒否することは、意志に訴えることによって可能となり、そしてこれは誉められるべき反逆の精神です。

一部の感情、希望、人間的な力は、アッラーの友である人々に、普通の人よりもずっと多く与えられています。一部の希望、望みが、彼らにおいては普通の人々のおそらく20倍以上あるのです。そういった希望や望みが常に彼らを刺激し、常に彼らの注意をひき、彼らの意志に衝突します。しかし彼らは非常に強い意志を持っており、また強い決意を秘めており、欲望や熱情に対し屈服することはないのです。常にドゥアーすることによってよい望みを思いを強くし、懺悔することによって悪い望みの根を絶つのです。罪であつたり過ちであつたりする思想には、常に砲弾や爆弾を浴びせます。善への傾斜の根元には水を与え、肥料をまきます。純粹で清い感情を育て、日光にあてます。そして常に正しい場でとどまるのです。意志を強くすることをアッラーに対しての重要な義務であると認識します。さらに、自分たちを捧げている教えへの奉仕が、個人的な世界を完全に満たすようになり、他のことで時間を費やす機会すらなくなるのです。

実際、今世紀の受難者であるお方は、「結婚することは全然考えなかったのですか？」と尋ねた人に対し、「イスラーム世界の苦難を考えることは、私に結婚を考える機会を与えなかった。ムハンマドのウンマの苦しみが、そういうことは忘れさせたのだ。」と語られています。これほどの深さをもつ自己犠牲、そしてその勇敢さ、気前のよさの顕示は、ほんの数件に限られているわけではありません。イスラームの歴史は、アッラーの特別なお恵みによって、こういった尊さ、輝かしさで満たされているのです。このような純潔さの勇者たちに関しては、「知識や教えへの奉仕を結婚に優先させ、生涯結婚しなかった学者」とい

う意味を持つ「アル・ウレマーウル・ウツァブ」という名称で多くの書物が書かれているほどです。

話がここに至った以上、関連するものとして次の項目にも触れる必要があるでしょう。結婚において最も自然であり、基本であるものは、預言者ムハンマドのスナに従うこと、そして結婚することです。ムスリムは家庭を築き、子供を持ち、預言者への愛情で満ちている次世代を育て、継続させ、その増加を保証するべきです。特に、末世の特徴が現れ始め、不徳徳が暴走してあらゆるところを自由に動き回り、不義が蔓延しているようなこの時代に、人々をその肉体と我欲と共に放っておくことは、彼らを災いへと引きずり込むことを意味するのです。だからこの点において本来あるべきものはこれであると信じているし、誰もこれに対抗することはできないと考えているし、対抗するどころか結婚は勧められるものだと認識していてもいます。可能な限り、私は適齢期を迎えた女性や男性を皆、結婚させるし、家庭を築く上で彼らを助けもします。

しかし、このように考えることは、勇敢な精神を評価することの妨げにはなりません。この世を、そしてこの世に属するものを遠ざけ、個人の快樂や喜びについては何も考えていない、そういったものを夢で見るだけでも自らを罵るような人々は、称えられるにふさわしいのです。自らに対し、「アッラーの使徒の旗が何カルシ（親指と小指を広げた長さ）も、何かデムも（一步に相当する長さ）も下に降ろされ、それ以外の者の旗が高々と掲げられているこの時代、ムハンマドの崇高な名が思い起こされることのないこの時代にあって、あなたは何に時間を費やしているのか。何をしているのか。」と問い、物質的、精神的な恵みにおいて自己を犠牲にする勇者たちは必ず評価されるべきなのです。彼らは自らを奉仕に捧げ、それ以外に熱意を抱くものを持たず、常にその理想を思い、奉仕への恋に焦がれたかのように生きる、特別なものを与えられた人々です。彼らの特別な状態は客観的な規則として承認されることはなく、皆に適用されることもありません。しかし彼らは、合法的な「反逆の精神」と「勇敢な魂」を象徴しているのだ、ということは一つの真実なのです。もし、反逆の精神という言葉が他の思想をも思い起こさせるのであれば、彼らの状態を「意志の闘争」もしくは「意志を正しく用いる」と表現することがよりの確かかもしれません。

反逆の精神ではなく、強情という不徳

このテーマにおける重要なポイントは次のものです。成熟した導師、老練の導き手、徳のある学者、そして公正な支配者のように人々の前に立つ者、人々を従わせる立場にある者は、その下にいる人々があらゆる観点から発展していくことを意図し、彼らが自分たちについての表明を容易にできるような機会を与え、彼らの考えを聞き、価値を与えるべきです。これが、そういう人々に与えられた任務なのです。彼らは何らかのことに関し、周囲の人々が自分の考えを持って参加できるよう支えなければなりません。これによって一つの考えを千の考えに到達させなければなりません。二つの知性が一つの知性よりも有益であるという真実を根拠にして、他の人々の考えにも価値を与える者は、特別な頭脳の持ち主と同じ位、あるいはそれ以上、適切な決定を下すことができます。従って、何度も言ってきたように、人は特別に優秀な頭脳を持つよりも、他者と論議するといったような、頭脳の優秀さを超えた徳を持っていたほうがよりよいのです。なぜなら相談することの価値を知っている人は、おそらくは百人もの人の考えから益を得る

ことができるからです。これによって、彼らに重きを置いていることを明らかにすることにもなるし、彼らの発達をも助けるものとなるし、さらには相談することによって人々の世界を広げ、そして自分の過ちを即座にただすという点でも、重要な一歩を踏み出すことになるのです。ジャー・パシヤに関連付けられているある言葉では、「真実の閃光は思考のぶつかりあいから生じる。」とされています。イスラーム世界においては過去から現在まで、先生と生徒の間に議論や討論があり、皆自分の意見を容易に述べることができました。そして誰が語ったものであれ、真実そのものに敬意が払われました。イマーム・アブー・ハニファヤイマーム・マーリク師のような導師たちが自身の生徒たちと行なった議論はよく知られており、有名です。

支配を行なう者が、他者にこの容易さや可能性を与えた場合、彼らも型にだけあてはめた形で生きることではなく、自らの考えを表明するでしょう。これを実行する際に彼らに課せられる義務は、決して反抗、対立、強情といった態度をとらないことです。必要であれば、「クルアーンのこの章句、スンナのこの命令、この思想家のこの考え、そして論理的にこの規則によるなら、その問題はこうであるかもしれない。」という形で考えを表明することはできます。このように振舞うこと、そのテーマについての解釈を丁寧に求めることもできるのに、異議を唱えるかのような形で質問をすることは、相手を不快にし、もしかしたら彼にも対立という感情を生じさせることになるかもしれません。おそらくは、規則が配慮され、丁寧さ、上品さを伴った議論、討論の結果、真実が明らかになるのです。しかし人の質問の品のなさ、他の人たちの態度の悪さによって、真実が害を被るのです。真実がねじ伏せられることは、人類全体にとっても大きな損害となります。

さらに、全ての点において異議を唱えること、あらゆる提案と対立すること、誰が何を話していようと、まだ話も終わらないうちに反対すること、そしてこれを一つの徳と見なすことは、率直に考えを述べることと同じカテゴリに分類されることはできません。一部の人々は他人とうまくつきあえないことを、革命的精神、反逆の精神を抱いているせいであるとしますが、それは妄想であり、自分たちの無作法さに言い訳を取り繕うとしているに過ぎません。彼らの状態は反逆の精神ではなく、ただ強情であると表現されるでしょう。話している相手がまだ話し終えないうちに反対意見を述べる人、単に話している人を気に入らないという理由で、明らかな真実であることすら認めようとしない人、誰の知識にも我慢できず、自分の知っていることだけが正しいと見なす人、さらには自分自身も気に入っている、正しく美しい言葉に対してすら異議を唱え、「あなたはよい形で話したが、よりよくより正しいのはこのようなものだ。」といった形の、悪魔のようなささやきを行なう人たちは、強情という性質を体現しているに過ぎないのです。

まとめとして、対立、反逆といった思考は最初に、実存主義の思想家たちによって、一切の独自の価値を認めず、一切の規則に従わず、あらゆる秩序に対抗し、全ての支配を拒否するといった形で登場しました。反逆の精神という表現をムスリムの学者も用いてきましたが、彼らはその問題を、意志の戦いとして認識してきました。虚無主義者によれば反逆という思想は、全ての規定の価値と対立し、政府を含め一切の支配を受けないこと、行き当たりばったり生きることを意味し、まさに「病んだ」思想です。ムスリムはそれを、意思を正しく用い、悪魔や我欲、欲望や罪に対抗すること、と位置づけているのです。



「恩返し」という言葉がありますが、私達は親切にしてもらったり、なにかをもらったりするとその「恩」を返そうと思います。「恩」とは「思い」であり、「愛」かもしれません。

私は常々感謝せずにはいられないと思っています。人間は神様に感謝するために創造されたと知る前にもそんな気持ちがありました。何かはっきりとは分かりませんでした。とにかく感謝せずにはいられませんでした。それは大好きな母親に対する感謝では足りないくらいの感謝だったので、この思いをどうしたらいいのか?と考えたこともありました。

「愛」にもいろいろな解釈のものがあると思います。例えば、家族愛、恋人に対する愛、動物に対する愛、自然に対する愛、自分のお気に入りに対する愛着、愛しい、愛くるしい、など様々に表現できます。私は「恩」と「愛」は似ていると思います。私が恩返しをする時、愛（いろんな意味での）を返しているような気がします。

ところで今私は子育て真っ最中ですが、わが子は本当に愛しいものです。コップに蛇口からひねった水（愛情）がどんどんあふれてコップから水がどんどん流れていくようなそんな感じがします。それと同時に、私の母親の気持ちが日に日に分かってくるのです。

分かっていたつもりが実際に自分が子育てを体験してみるとなるほどこういう気持ちなのか。母の愛情とはこういうことなのかと再度思い返しています。イスラームで母親への愛情を示すことが強調されていることにもうなずけます。

さて、これほどの愛情をもらったその「恩」を返したいと思いますが、その重みは大きく、とても返せるようなものではないような気がしています。その分自分の子供にたっぷりの愛情を与えて、いずれ子供も親になりそのことを実感し、そして次へ、次へ、と続くのでしょうか。相手の喜ぶ顔を見るのが好きですし、愛情も伝えられるので「恩返し」は好きですが、母親には一番恩を返したいのに、唯一その恩を返せないなと感じています。

お母さんに返すことさえも出来ない私はこの世に生きることの出来た「恩」を返せないのも事実で、でもそのことを考えたところに神様の「恵美」を思い出しほっとします。



懇願し克服すること

ユーヌス・イブン・マッタ(我らが預言者と彼の上に平安あれ)のドゥアーは最も強力な懇願であり、祈りの答えを得るための最も効果的な手段です。ユーヌス(彼の上に平安あれ)の名高い物語の要点は以下の通りです。

彼は、海の中に投げ入れられて、大きな魚に飲み込まれました。海は荒れており、暗く、絶望的な状況でした。しかし、そのような状況で、彼が行なったドゥアー、

「あなたの外に神はありません。あなたの栄光を讃えます。本当にわたしは不義な者でした。」は、救済への迅速な手段となったのです。彼の懇願の力の秘密は次のようなものでした。

全ての可能性が尽きてしまったその状況で、彼は、魚と海と、夜と、空を抑えるよう命じることのできる存在を必要としていました。夜、海、そして魚は彼に対して団結していました。この三者全てを制御することのできる存在のみが、彼を救出できる可能性を持っているのでした。創造されたもの全てが彼の召使や援護者になったとしても、それには何の意味もありませんでした。媒介であるものからは、何も得られないのです。ユーヌスは、あらゆるものの原因である存在以外に庇護を求め得るところがないことを確かに認識しました。

そして神の唯一性の光の中で、彼の懇願は突如として、夜、海、そして魚を克服することができたのでした。神の唯一性の光を通して、彼は魚の腹を潜水艦に変えることができました;そして、爆発している火山のように恐ろしく、波打っている海を、平和な平野、散策に出かけるような心地のよい場所へと変えました。唯一性の光を通して、彼は、空の表面から全ての雲を取り除き、彼の頭上にランプのような月を見出すことができました。四方から彼を圧迫し、脅かし続けていた被造物たちが、いまや四方八方から彼に親しみのある顔を見せていました。そして、彼は救済という岸に着きました。彼は瓢箪ひょうたんの木の下の、彼の主の慈悲の証人となっていました。

現在、私たちは、ユーヌスの最初の状況よりも、100倍すさまじい状況にいます。私たちにとっての夜は、未来です。私たちの未来は、のんきさに満ちた見通しによって、彼の夜よりも100倍も暗く恐ろしいものです。私たちの海は、この回転している地球です。この海のそれぞれの波には、何千体もの死体が存在し、彼の海よりも1000倍恐ろしいです。私たちの魚は、私たちの永遠の生命の基礎を揺さぶり、破壊しようとしている私たちの気まぐれな我欲です。この魚は、彼を飲み込んだ魚よりも1000倍有害です。彼を飲み込んだ魚は、彼の100年ほどの寿命を破壊することができるものでしかなく、私たちの魚は何億年も持続し得る人生を破壊しようとするものなのです。

これが、私たちの本当の状態です。だからこそ、私たちもユーヌスのようであるべきなのです。娯

介に過ぎないあらゆるものに背を向け、そして、直接、私たちの主に、庇護を求め、「あなたの外に神はありません。あなたの栄光を讃えます。本当にわたしは不義な者でした。」と言うべきなのです。

そして、私たちの不注意や逸脱のために、私たちに対抗的な形で結びついている未来、この世、そして私たちの気まぐれな精神の害を、私たちから退けることができるのは唯一このお方のみ、とすることを確実に理解しなければならないのです。未来はそのお方の命令のもとにあり、この世界はそのお方の管理のもとにあり、私たちの精神はそのお方のご意志のもとにあります。天と地球の創造者を除いて、いったいどのようなものが、最も微妙で秘められた、私たちの心中の思いを知ることができるでしょうか。誰が、あの世を創造することによって、私たちの未来を輝かすことができるでしょうか。誰が、この世の無数の高波から私たちを救うことができるでしょうか？

存在が必須であるそのお方以外のなにものも、どのような方法であっても、そのお方のお許しとご意志がない限り、救いとなることはできないのです。

ユーヌス（彼の上に平安あれ）の懇願の結果、巨大魚は乗り物か、潜水艦となり、海は穏やかになり、そして、夜も、月光によってそっと照らされるようになったのです。だから私たちは、そのドゥアーの神秘のうちに、「あなたの外に神はありません。あなたの栄光を讃えます。本当にわたしは不義な者でした。」と言うべきなのです。

「あなたの外に神はありません。」という文で、私たちの未来に、「あなたの栄光を讃えます」という言葉でこの世界に、そして、「本当にわたしは不義な者でした。」という句で、私たちの精神に、慈悲のまなざしを惹きつけます。それによって、私たちの未来は信念の光とクルアーンの月明かりで照らされます。そして、夜の畏敬と恐怖は安らぎと喜びに変えられます。

クルアーンという造船所で創られたイスラーム真実という船に乗り、常に生と死が訪れ、年月、世紀という波に無数の死体が乗せられ、放り出されるこの世界という海を、無事に渡り、やすらぎという岸に到着し、私たちの人生の義務を成し遂げるのです。海上の嵐と荒れ狂う波は、映画のスクリーンのように、映し出す光景を変え、恐怖と畏怖の代わりに、注意を喚起するまなざしや熟考をほめ、優しく撫で、輝かせるのです。そしてクルアーンの神秘によって、クルアーンによる私たちへの教諭^{しやうご}によって、私たちの我欲が私たちを支配してしまうことはなくなり、逆に私たちを乗せ、永遠の生を手に入れるための力強い手段となるのです。

まとめるならば、人間はその本質から、地球の震動や揺れに震え、最後の審判の日のあらゆる被造物の揺れに震えます。ごく小さな細菌を恐れるように、空に現れる流星すらも恐れます。また、自分の家を愛するように、この広い世界をも愛します。自分の小さな庭を愛するように、限りなく永遠である天国をも深く愛します。当然、このような人間の崇拜の対象、導き主、よりどころ、救い主、そして望みは、その力が宇宙全体に及び、原子も惑星もそのご命令のもとにあるお方でしかありえないのです。だからこそ、人は、常に、ユーヌスのように「あなたの外に神はありません。あなたの栄光を讃えます。本当にわたしは不義な者でした。」と言うべきなのです。



ブラックホール、そして審判の日に起こり得ることの描写

The Fountain 2007 / By Osman CAKMAK

【その日われは、書き物を巻くように諸天を巻き上げる。われが最初創造したように、再び繰り返す。これはわれの定めた約束である。われは必ずそれを完遂する。】(預言者章第104節)

【天が、微塵^{みじん}に裂ける時、諸星が散らされる時、諸大洋が溢れ出される時、】(裂ける章第1-3節)

最後の審判の日に起こり得ることは、クルアーンではっきりと描写されている。それに関連する章句は、最後の審判というのが地球にとっての終焉であるだけでなく、宇宙規模であり、他の惑星もそこに組み込まれていることを強調している。要因について考慮する限りでは、重力を含む全ての力を与えている力強いシステムを分解させ、その軌道から惑星や星を散らすような力は、何によって可能となりえるだろうか。

次の章句もまた、この力が、「輝かしい」天体にも影響を与えることをほのめかしているようである。

「太陽が包み隠される時、諸星が落ちる時、山々が散る時、」(包み隠す章第1-3節)

「太陽が包み隠される時」という語における、「包み隠す」という語に関しては、有名な学者であるファクフレディン・ラジーは、第3代カリフ・ウマルの叙述と一致している意見として、この言葉を「光がなくなることによって暗くなること」を意味する、と解釈している。神の定めは、この物理的な世界で、光を折りたたんだり集めたりということをどのようにし得るのだろうか。過去数年間、科学者達ははずと、ブラックホールの引力がそのような役割を果たす可能性について考えてきた。周知のように、ブラックホールの引力からは物質と同様、光すらも逃れることができないのだ。

上記の句で描写されている出来事は、創造主の意志と共に、ブラックホールによって起こるものかもしれない。私たちが火の玉の上に座っており、大気を構成するガスが重力によって地上で保たれているということは一つの事実である。しかし強い重力の衝撃があれば、私たちが吸う空気は、地球から消失する最初のものとなるだろう。そのような外圧の消滅がある状態では、70パーセントが水で構成されている被造物の内部からの圧力が優勢を獲得し、被造物をばらばらにすることとなる。

他の惑星では、太陽系の二つの小惑星ゾーンに見られる何十億もの星(小惑星、流星、彗星)の重力帯(それらは全て、神の力によって支えられている)はブラックホールの力によってばらばらにされるだろう。

また幾何学的な重力バランスもまた、おそらくは審判の日の開始において役割を果たすかもしれない。一般相対性理論で見られるように、宇宙の時空水平度は、クルアーンの語を引用するなら、折りたたまれることが可能であり、1枚の紙と同じようにしわくちゃに丸められることが可能なのだ。その場合、星たちはそれぞれの位置から動かされ、その場所から落下するだろう。

布や網状のものが重いものの衝撃を受けて伸ばされたり、破壊されたりするのと同様、時空の網である宇宙もまた伸ばされ、裂けたり割れたり、あるいはより正確には穴が開いたりするだろう。その中に

置かれた密度の高いものによって。すなわちそれがブラックホールである。この破壊は自然界の法則の無効化を意味するのだ。

宇宙の中心に置かれたブラックホールが徐々に広がると考えることも可能です。銀河全体が実質的なブラックホールとなり、全てのブラックホールの一体化によって宇宙全体がそれ自体ブラックホールとなるまで広がると。

ラクダが針の穴を通るまで・・・

[わが印を偽りであるとし、それに対し高慢であった者たちには、天の門は決して開かれぬであろう。またラクダが針の穴を通るまで、かれらは楽園に入れないであろう。このようにわれは罪ある者に報いる。] (高壁章第40節)

針の穴を歩いていくラクダは、宇宙がどのように一つの、ブラックホールの小さな開口部を歩いていくのかを考えさせる。この比較は、どのように巨大な球体がブラックホールに飲み込まれるのかを思い起こさせる。ブラックホールは仮想上の弦のように伸びるかも知れない。そしてついに、球体はそれ自身よりもずっと小さなものに取り込まれるのかも知れない。太陽より何十万倍も大きい星でも、空間や時間そのものがねじれ、曲がってしまうブラックホールのそばでいったんゆがみ始めると、針の穴ほどに縮小するのもかも知れない。

ブラックホールの重力がピークとなる中心部は、「事象の地平面 (シュヴァルツシルト面)」と呼ばれる。ブラックホールは私たちが他の宇宙に入る通路かもしれない。このような状況において、ブラックホールに落ちた宇宙飛行士がどうなるかを、私たちは仮定的に予想することができる。

私たちの時計を宇宙飛行士のもの合わせ、私たちは事象の地平面に向かう彼と別れに別れを告げる。宇宙飛行士が、重力が徐々に増加する事象の地平面に近づく時、私たちは彼の時計がよりゆっくりと動きだしたことに気がつく。太陽のサイズのブラックホールの事象の地平面にいる時には、私たちの時計が1秒を示す時、宇宙飛行士の時計は3.3秒が過ぎたことを示している。彼がいる所では時間がはるかに遅く流れるのだ。

事象の地平面に宇宙飛行士が近づくにつれて、彼の時計では私たちの1秒に対して3.3秒が示されるようになる。そしてついに彼が、事象の地平面に完全に入ってしまうと、時間は凍りつき、每秒感の差異がなくなる。

宇宙飛行士はこの仮説上の旅をどのように感じるか

宇宙飛行士が認識するのは、時間が遅くなることだけではない。事象の地平面に近づく時、彼はまた、自身の体の伸張を目撃するかもしれない。重力が先端、すなわち彼の頭や足により負担をかけるので、宇宙飛行士が「何が起きているのだ？」と問うまでには、彼は既に弦のように伸び始めているだろう。事象の地平面に近づくにつれ、宇宙飛行士にとっての1秒は宇宙の中よりも1ヶ月、もしくは1年、遅いものとなり始める。地平面にから一歩離れている所では、宇宙の全ての未来が宇宙飛行士のほんの1秒に収まってしまう。彼は今、その特異点に高速で引き込まれ、そして気がつくまで反対側にいる。そこは特殊

相対性理論が適用されるエリアであり、それは光速が絶対的な速度である、という理論をベースとしたものである。すなわち、宇宙における最大速度はその有効性を失う。そこに近づくに従って、宇宙飛行士や宇宙船に影響する重力は、その速度が光の速さそのものを超えるほど、猛烈なものとなる。このように、光を凌ぐ速度が実現可能となることは、全ての因果律原理を時代遅れの学説としてしまう。時代を逆行する旅行も可能となる。この問題の解釈は次のとおりである。特異点に落下した人は、宇宙の全ての歴史を一瞬で見るかもしれない。彼らはその時、タイム・トラベラーとなる。過去と現在、そして未来が全て、彼らの視野に示されているのだ。針の穴を通るように、彼らは別の宇宙へと移動するだろう。

イマーム・ガッザリーは、その書簡で、最後の審判の日に関する章句の解釈を行なった際、宇宙の終焉について強調している。

「角笛が吹かれ神が審判の日の開始を決められる時、あなた方は、飛び交い、雲のように動き回る山、お互いに交じり合う海、包み隠され暗くなった太陽、ひもから外されたビーズのように散らばる星、石臼のように激しく回転する空、皮のように伸ばされ恐ろしいほどに震動する大地を見るだろう。神が軌道を解放し、地上や天空で生きながらえるものはいなくなるだろう。魂を与えられたものたちはその魂を引き渡す。」

一方サイド・ヌルシィ師は綿密に調整されたつながりの解消を強調する。重力、そして電磁や核の力のような普遍的な存在に言及しながら、最後の審判の日について次のように語っている。

「クルアーンにおける詳細な説明と、宇宙を構成する物質の正確な相互関係を考えて見なさい。そのシステムにおける、崇高で優美な構成について考えて見なさい。天体がその軸を去るよう命じられるならば、宇宙は死の苦しみに放り込まれるだろう。星はぶつかりあい、惑星は撒き散らされ、それらの爆発する音が宇宙にあふれるだろう。山々が動き始め、そして地球は破壊されるだろう。永遠なる力はこのようにして次の生命をもたらされる。そして天国と地獄は互いから切り離される。」

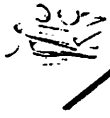
ヌルシィ師は、世界の終わりがどのようにして起こるかに関わりなく、クルアーンで繰り返し強調されていることは必ず実現するだろうと主張している。

「もし宇宙が外部からの破壊的な出来事を通して破壊されないとしても、永遠なるお方のお許しによって、それは結局死に始めるだろう。科学者ですらそう述べている。クルアーンによるなら、それは鋭い泣き声をあげ、そして次のようなことが起こるだろう。

「太陽が包み隠される時、諸星が落ちる時、山々が散る時」(包み隠す章第1-3節)

「天が、微塵に裂ける時、諸星が散らされる時、諸大洋が溢れ出される時」(裂ける章第1-3節)

ここでの目的は、現代科学によって私たちに与えられている知識という視野を通して、クルアーンによって奇跡的に予告されている驚くべき出来事について考え、より広い見解を得ることである。しかし神のみが、現在、そして未来に起こる出来事の正確な形をご存知であられるのだ。



『ムッソリーニとお茶を』 Tea With Mussolini

今月のテーマは「恩返し；恩を忘れないこと」です。誰かにしてもらった何かをありがたく思い、それに報いようとする。その人のために尽くそうとすること。それは日々の生活の中でもたくさん見出すことが出来ますし、それを中心に感動的なドラマに出来るほどのことの場合もあります。

今回ご紹介するのはそのうちの、感動的なドラマのほう。第二次大戦中のお話です。

1935年、イタリアのフィレンツェ。在伊英国人で服地商の秘書メアリーは、母親を亡くして孤児院に入れられていた服地商の私生児ルカを英国紳士に育てて欲しいと頼まれる。メアリーは困惑しながらも友人の芸術家アラベラ、元大使の未亡人レディ・ヘスターら英国婦人グループの協力を得、彼の教育を始める。そのグループの周辺にはラフで明るく生きる考古学者ジョージ、元踊り子で富豪と浮名を流し続けるエルサら、米国人女性の一団もいた。奔放なエルサはヘスターから嫌われ蔑まれているが気に留めず、ルカに教育用の信託資金を提供してくれた。

やがてファシズムが台頭し外国人排斥運動が起こると、ヘスターらはムッソリーニに直談判に行き、そこで英国式にもてなしを受けたものの、結局おしゃべりの場であったウフィツィ美術館からも追い立てられてしまう。更にルカはドイツ語学習のためにオーストリアへ留学させられてしまう。

1940年6月。成長したルカが帰国すると、育ての親の英国婦人たちは強制収容所に移送される場所であった…。

第二次大戦が舞台の話なのですが、不思議と暗い部分は無く、のびのびと暮らしている女性たち、運命に翻弄されているように見えつつもそれに立ち向かっている女性たちの姿が見える映画です。

後半、強制収容所へ入れられた英国婦人たちはそれでも「ムッソリーニがどうかしてくださる」と希望を失いません。彼女らをそこへ送ったのは彼女のものにもかかわらず、です。しかしある日、きちんとしたホテルへ移動させられます。ヘスターは「やっぱりムッソリーニは私たちのことを考えてくださっていたのだ」と喜び、早速支配人にムッソリーニと撮った記念写真を飾らせます。実は、ホテルへの移送の手配、ホテル代の支払いなどを裏でアレンジしていたのは、ヘスターが心底馬鹿にしていた米国人、エルサだっ

たのです。「何故あの老女たちを助けるんだ？一財産消えるぞ？」という恋人に向かってエルサは一言、

「皆、歳なのよ！それに私は皆を尊敬しているの。だから、助けるの」

…そうそう言えるセリフではありません。でも、エルサにとって英国婦人たちは尊敬に値するような人たちだったかしら。レディ・ヘスターからは「あの女はふしだから嫌いなの」と言い放たれていたわけだし。でもそこで、ルカのことが思い出されます。エルサは仕立師だったルカのお母さんにドレスをたくさん縫ってもらっており、世界の腕前だと言っていました。そしてとてもお世話になったし、お金を受け取らない時もあったから、そのお金で教育用の信託基金を作りましょう、と言ってくれたのです。まあ、本当の所はわかりませんが、エルサはルカを快く引き取り立派に育てていたという点で、婦人たちを尊敬してのかもしれない。

最終的には米国人であるエルサも収容所おくりになってしまいますが、そこで今度はレジスタンス活動をしていたルカに助けられることとなります。そこに至って、ようやくレディ・ヘスターは本当の支援者がエルサであったことを知りますが、そこは本物の英国のレディー、

「私たちは馬鹿にしあい、違う世界に居たと思っていたわ。けれどもあなたは黙って親切にして下さって、お礼ひとつ求めたことは無かった。許して頂戴」

と直ぐに自分の非を認め、更には自分たちのことは放っておいてエルサを逃がすため彼女を説得するのでした。

話の中でも出てくるセリフですが、人の親切を忘れずに人を助けると、めぐり巡って「救ったものに救われる」こととなります。ルカを身ごもった母親に産めと言ってルカを救い、更には英国婦人グループを救ったエルサがルカとレディ・ヘスターに救われることになったわけですね。エルサがヘスターらを救ったのには、ヘスターらがルカを救ったからというのもあり、ぐるぐると色々なことが繋がって、恩返しは恩返しを生む、といった感じになっています。

些細なことで人は人を蔑みますが、同じように些細なことで人は人に救われることもあるのです。どんな時も、どんな些細なことでも、「ありがとう」という気持ちを失ってははいけませんね。どんな状況に置かれても強く、そして希望を失わない。その状況の中で最善をつくそうとし、信念をまげない英国人女性たち。イタリア軍ですら太刀打ちできなかった、そんな彼女らのストーリーから、なんだか色々学ばされることが多いですね。

『ムッソリーニとお茶を』 1998年 イタリア/アメリカ 114分

監督： フランコ・ゼフィレツリ

出演： シェール（エルサ）/ジュディ・ディンチ（アラベラ）/ジョン・プロウライト（メアリー）/マギー・スミス（ヘスター）ほか



質問：死を迎える時とその様態はあらかじめ定められているのですか？

死を迎える時とその様態を含め、あらゆる出来事は運命付けられています。すべては神の命令の枠組みの中で、そして各々に定められた個々の計画のうちに起こります。そうした計画は常に、相互に調和を保っています。これは、永遠の過去において神によって打ち立てられた法則です。それは決して変わることなく、永遠の未来まで続くでしょう。

確立され広く受け入れられている実証的科学的原理は、すべてがそうした設計と決定に則って作られ、運営されていることを確認しています。そのような運命がない場合、宇宙の秩序や調和、壮大さは理解ができず、また説明もつきません。それどころかいかなる科学的進歩もみられないことになります。神が運命として定めた、宇宙に存在する数学的・幾何学的な設計があることによって、我々は人類と宇宙の双方を探求するために信頼性のある原理を通じて研究室での研究を行うことができるのです。

科学というものがすでに存在するものを反映し明らかにし、それらを支配する原理に名前とタイトルをつけるための方法に過ぎないと言うことは、発見や技術革新の数々を貶めることにはなりません。科学の地位と影響力を指摘することによって、我々はただ、そうした秩序も調和も科学的発見や発明がなされる遥かに前から普遍的に存在していたということ、そしてそれは創造者がそれらを宇宙のまさに基礎とされたからだという、重要な事実を思い出すのです。

社会学者の中には、人間以外のすべての存在に共通すると思われる原理の数々を人類にも当てはめようと試みる者たちがいます。これは極端な運命論で厳しく批判されなければなりません。しかしながら、宇宙とその秩序が依存する運命そのものを認めている範囲で有益であるといえるかもしれません。

信仰や信条に関わるいかなる事実も、人間が支持し受け入れること、もしくは人間がそれを妥当だと認めることを必要とはしません。なぜならそれは神からもたらされたものであるからです。しかしながら、人々の主張に対抗できるのであれば、それは人々を正しい道に呼び戻すという我々の大義に役立つものであります。そうでなければ、あらゆるものが完全な均衡や調和、そして秩序にしたがって機能していることは明白で、それらすべてが全能者であられる統治者による運命付けを立証するに十分です。存在が始まった時点から、それらは神の意志、力、そして運命を完全に順守し服従して動いてきているのです。

予定説は人類にとって違った重要性を持っています。我々が創造されたのは必然性によるものであり、

また同時に他の被造物と同じく、創造されたわけですが、自由意志が我々を独特な存在としています。神は我々が個性や人格、特徴を持てるようにと、我々に思考し、判断し、意見を形成し、選択する道徳的な自由を授けてくださいました。実に、問題が生じるのはただ、一部の人々が人類もその他の被造物と同じだと考えることからなのです。

我々には（限られてはいるのですが）本物の自由意志、選択の力、そして意向が備わっています。これらをどう使うかによって我々は善や悪、報酬もしくは懲罰を得るのです。我々は自分自身が行う意識的または無意識の選択を通じて、行為の結果を自身に引き寄せるのですから、我々自身が発動したことについて神を非難することはできないのです。特定の行為に付属する報酬や懲罰の割合は神次第です。

二番目の点：人間の自由意志と神のあらゆるものを包含する知識とはどのように調和するのでしょうか？

神の知識において、存在とそれを超越したあらゆるものは人間の「時間」の概念に縛られることはありません。よって、「前」「後」「原因」「結果」といった人間の諸概念は全く意味をなさず、我々が適切な順序とみなすような形では起こりません。端的に言えば、それらはただそうであるだけなのです。結果的に、神は、我々の意向と我々がなすであろうこと、我々が実際なすこと、そしてその結末を同時に認識しておられるのです。この事実は我々の自由意志の正当性を認識するものです。なぜなら我々の意向が考慮され、重要視されるからです。言い換えれば、神は我々の気持ちが傾くものを創造され、また彼はその結果を予見しておられるのでしかるべく結果を運命付ける、ということを神は明かしておられるのです。これは神が我々の自由意志に完全なる重要性を付与していることを意味します。誰も規定の路線に従うことを強制されることはなく、皆、自身の行いに責任があるのです。

運命と予定は神の知識に応じて作用します。何かを予知することがそれを決定付けたり、要因となったりすることはありません。神の意志と力が我々の意向を元にしてものごとを出現させるのです。よって、起こった出来事や出現したもののごとは予見されたからそうなったものではありません。そうではなく反対に、それらがそうであるから知られたということなのです。予定説についても同様のことが当てはまります。例えば、天気予報士は正確に「予測」することによってその天気を「引き起こしている」わけではないのです。選択と意向の結末を予知し見越し、ゆえにそれが成就するであろうことを確約する全能の神の力は、神がそれを引き起こしていることを意味するわけではないのです。

もう一つ例を挙げることによってこの議論を終わりにしたいと思います。殺人者は彼らの行いの責任を問われぬ、なぜなら彼らはその実行を「運命付けられ」、犠牲者はその形で亡くなることを「運命付けられ」ているからだ、と言う人々がいます。この主張はばかげています。真実はといえば、神は彼らの意向を考慮に入れ、彼らの行動に照らして環境を準備し、そして完璧な公正さをもってその許しがたい罪の責任を問うのです。



ドゥア（祈り）のある毎日へ

おそれる者達にとって最も安全なお方

最もよく求められるお方

最もよく望まれるにふさわしいお方

最もよく好まれるお方

最もよき目的とられるお方

最もよく創造するお方

最も感謝されるのにふさわしいお方

最も愛されるのにふさわしいお方

最もよく善、恵みを降り注ぐお方

最も親しい友

あなたは完全無欠なお方、あなたに栄光あれ、

あなたの他に真の神は存在しません。私達を地獄の炎からお助け下さい。⁴



レシピーコーナー

カボチャのスープ

材料：カボチャ 半分 牛乳 500CC

ブイヨン 1こ 塩 こしょう 少々

作りかた：

カボチャの皮をむき中の種をとる

カボチャを適当な大きさに切り、鍋に入れて水がかぶるぐらい入れて、そこにブイヨンを入れ柔らかくなるまで煮る。

煮立ったらミキサーに入れてそこに牛乳も入れて滑らかにする。冷たく飲んでも美味しいです。

⁴ジャウシャン・カビール（偉大なる鎖帷子、アッラーの美しい御名と属性を知らせるお祈り）には、祈願、唱念、救いを望むことが記されています。それは、真の主アッラーの多くの御名を知らしめ、それらの御名と共にアッラーへ祈願し、近づく方法を示す大変貴重な意味深い書です。鎖帷子は戦いの時、身を攻撃から守るために着ます。人間の靈魂に授けられた善美を守るためには、偉大なる鎖帷子のような精神的鎧が必要です。本来、（ジャウシャヌカビール）が精神的世界のみではなく、物理的世界においても守りとなると伝えられています。ジャウシャン・カビールのアラビア語／日本語訳オーディオ CD・ROM またはプラスチックカバー本は出ています。詳細は：<http://www.isuramu.com/shopping>



『一杯のコーヒーには40年の思い出がある。』

というトルコのことわざを初めて知ったのは大学生の頃だった。このことわざにはいくつかの意味があって、ほんのちょっとした時間を共有しただけでもその思い出を生涯忘れずにいることとか、コーヒー一杯をご馳走してもらったというようなささやかな恩でも、ずっと忘れずにいることとかの描写である、ということだった。トルコ語で『40年』という表現は、『とても長い時間』を意味するものだということが同時に知ったが、20歳にもなっていなかった当時の私にとって、40年というのはあまりにも長い時間を感じられたのを覚えている。

それから実に13年ほどの年月が過ぎた。今の私には、40年にはまだ遠く及ばなくても、11年間忘れられずにいる一杯のお茶の思い出がある。

イスタンブールに留学し、学生寮での暮らしにもまだ慣れない頃、私は花粉症にでもなったのか、咳が止まらなくなった。薬局で咳止め薬を買ってみたりしたが治らない。数日後には夜も咳が出るようになった。

寮では二人部屋で、トルコ人のFさんという人が同室だった。詩を書くのが趣味という彼女はとてももの静かな人で、新参者としていろいろ教えてもらったりしていたにもかかわらず、私はあまり彼女に馴染むことができずにいた。

その夜、ベッドに入って何時間しても咳が止まらなくなった。薬を飲んでもうがいをして、水で喉を潤してみても、数分収まっていればいい方ですぐにまた咳き込む。夜半になってさらにひどくなり、眠っていたFさんが起きたのが心配でわかった。「今日は試験があって疲れてるって言ってたのに、起こしちゃって申し訳ないな。」とは思ったが、咳は止まらない。Fさんはベッドに身を起こしてしばらく私の様子を見ていたようだったが、おもむろに立ち上がると何も言わずに部屋を出てしまった。

「あー、こんなうるさいのがいると眠れないから他の部屋で寝るんだな、でも他の部屋っていっても空いてるベッドとかあるのかな。申し訳ないな。」と私は思った。横になるとさらに咳がひどくなるのでベッドに横になることもできず、一人ベッドに座ったまま咳き込み続けていると、異国で体調を崩す不安さをしみじみと感じた。

30分ほどそうして咳と格闘していたかと思う。部屋のドアが開いたのでそちらを見ると、Fさんがいた。「遅くなってごめんささい。お湯を手に入れるのに時間がかかっちゃって。このお茶はのどにいいから飲んでみて。咳が止まるといいけど。」と言って、湯気をあげている大きなマグカップを差し出してくれた。そこには独特のおいひのする、赤いお茶が入っていた。トルコ語でクシュブルヌ、いわゆるローズヒップのお茶らしかった。

しかしそれが何であるかということなどより、「うるさいから別の部屋に寝に行った。」と勝手に思っていたFさんが、深夜の学生寮で30分もかけてお湯を手に入れ、お茶を作って持ってきてくれたことが私

にはまず驚きで、とても嬉しかった。台所を備えた普通の家ならともなく、学生寮で、食堂も喫茶室もとっくにしまっているそんな夜中にお湯を手に入れることが容易ではないということは私にも理解できたし、なにより30分も時間がかかったことがそれを裏付けていた。

驚いたのと感動したのとでは私は数秒、お礼を言うのも忘れて固まってしまっていたが、「熱いよ。」と手渡されたマグカップの重さで我にかえって、急いでお礼を言った。Fさんははにかむように笑って、自分のベッドに戻った。この時も、それ以降も、Fさんは決して恩を着せるようなふるまいを見せない人だった。

そして、おかげで咳はかなり軽減され、私はどうにか、朝まで咳き込み続けずにすんだ。心細い気分には浸っていたあの30分の後、予想もしていなかった親切な行為に触れたことは、その後のそこでの滞在に大きな影響を与えたと思う。さらには大げさではなく、今の自分のあり方にも少なからぬ影響を与えていると思う。信仰を持って生きることが人に何をもらすか、ということを目の当たりにする貴重な機会だったし、自分にないものに気づかされた出来事でもあった。

同時期にイスタンブールに留学していた日本人留学生に、こんな話を聞いたことがあった。彼も、その国での暮らしをスタートさせたばかりの頃はまだ周囲に馴染むこともできず、周囲に対して警戒心すら抱いていたという。そんなある日、体調を崩し、ベッドから起き上がれなくなった。急に吐き気を催したが、トイレ等に行く力もなく、「何か容器を」と頼むのが精一杯だったとか。同じ部屋にいた友人たちが急いで探したが、あたりには都合のいい袋や容器がなかった。もう我慢ができない、という状態になった時、彼らの一人が両手を差し出し、「ここに吐いて。」と言ったという。その出来事がきっかけで、その人自身大きく自分を変えたとし、生き方も変わったと言っていた。

この夜のことは11年を経た今でも忘れられない。そしてこのような思い出があること、すなわちそのような出会いがあったこと、そのような恩を受けることができたことはとても幸運だったと思う。こんな貴重な機会が与えられたことに感謝し続けていきたい。



購読価格（郵送料込み）バックナンバーは、1部200円（日本以外は1部250円）

国内： 1ヶ月 250円、 6ヶ月 1300円、 1年 2500円

国外： 1ヶ月 300円、 6ヶ月 1600円、 1年 3000円

（2004年、2005年、2006年のやすらぎカバー付き製本：郵送料込み2500円）

郵便振替口座番号：00100-6-354012 口座名義：月刊誌やすらぎ

三菱東京UFJ銀行 店番号：630（春日部）口座番号：1134374 口座名義：月刊誌やすらぎ

皆様のご意見、ご感想、ご質問をこちらのコーナーまで心よりお待ちしております

<http://www.yasuragiweb.com>

info@yasuragiweb.com

yasuragi_nihon@hotmail.com

「やすらぎ」編集部